

# アフター男の 異世界 通販生活

朝倉ニニニ  
イラストやまかわ

「試し読み版」

An illustration of the main characters from the game. In the background, a man with dark hair and a goatee (Kenichi) looks towards the viewer. In the middle ground, a girl with long black hair (Azalea) and a girl with short blue hair (Anemone) are visible. In the foreground, a girl with short blue hair (Anemone) is looking towards the viewer. To the left, a man with long brown hair (Shaga) is seen in profile. The background features a bright sky with yellow and red flags.

# 主な登場人物

Main Character

## アザレア

宿屋で働く少女。ちゃっかり者で抜け目ない性格。甘いものに目がない。

## ケンイチ

北海道の山中で異世界に転移した普通のアラフォーおっさん。ネット通販スキル「シャングリ・ラ」とアイテムBOXを利用して、異世界でスローライフを目指す。

## シャガ

50人ほどの野盗のリーダー。性格は残忍で、目的のためには手段を選ばない。

## アネモネ

悪党にさらわれた不遇な少女。ケンイチを頼っている。

### ミャレー

獣人の女の子で、弓を使った狩りが得意。直感に従って行動する。

### ニャルメロ

筋骨隆々の獣人。考えなしで、一直線に行動してしまうタイプ。

### マロウ

マロウ商会の主人。温和だが、常に商売のことを忘れずに行動する。

### ブリムラ

マロウ商会の一人娘。温和だが、思いついたら押し通すタイプ。かなり商売熱心。

## 1章 転生したら通販チート持ちになっていた

——気が付くと、森に立っていた。

鬱蒼<sup>うつそう</sup>として大木が立ち並び、見える範囲では終わりが無い暗い森。

下草が生えていないので、結構な範囲まで見渡せる。俺のいる場所は、針葉樹らしい真つ直ぐな巨木が根っこを露<sup>あち</sup>わにして倒れているので、その空間だけポツカリと穴が開き、そこだけ陽の光が差し込んでいる。見上げると空は青空だ。

さて、この状況は何なのだろう。

記憶を洗ってみる——自分の名前も、歳も、住所も思い出せる。

田舎にやつと開通した光ケーブルを使って、インターネット上でイラストを描く商売を細々としながら、家庭菜園などでスローライフを楽しんでいたオッサンだ。

近所の山へ山菜採りにでも行って、事故に巻き込まれたのだろうか？ それにしては身体に異常はない。ピンピンしている。

「何だっつんだ……」

独り言を呟<sup>つぶや</sup>いてみても、当たり前だが何も解決しない。

どうすりゃいい？ どこにいるのかが分からなければ、文字通りの遭難だ。この場に留まってもどうしようもない。俺はあてもなく歩き始めた。

しばらく森を歩くと汗ばむが、長袖シャツを腕まくりしたりはできない。森には虫や蛭じゅうがいるからだ。どういう状況かは分からんが、長袖シャツを着ていてよかつたぜ。下はいつもの安い作業ズボンと、デイスカウントショップで買ったスニーカーだ。森の中なら、長靴を履いていれば完璧だったが……致し方ない。

起伏のない地面なので、山でもないのだろう。俺の家の近所にこんな場所はないはずだ。

「ふう……」

一息ついて、辺りを見回す——何も無い。熊でも出たら終了だな。喉が渴いたし、ポケットを弄もよほつても空から……。腹も減ったが水も食料も何も無く、周りにはキノコが生えているのだが、見たことがない物ばかりだし、それに——キノコなんて栄養が全くない。このままじゃいずれば人生が終了するのが目に見えている。

「こりゃ、拙ますいぜ。どうにかしてこの森を抜けて人里に出ないと」

再度辺りを見回す。すると、何か白い物が光ったような気がした。

取りあえず、そこへ行ってみることにした。

「おお……なんじゃこりゃ」

何か光った場所に辿り着く。大木の根元に横たわるのは、錆が浮いた銀色の甲冑。中世の騎士が着ているような、プレートアーマーとか呼ばれる鉄製の鎧だ。

野生動物に荒らされたのか、少々バラバラになってはいるが……。中身もちゃんと入っており、顎と首が外れた骸骨が、こんには——している。

「やべえ、死体発見だよ」

ビビりながら周りを探すと、剣も落ちていた。両刃の真っ直ぐの剣——おそらく、両手持ちの立派な物だと思われる……。

仏様には少々可哀想だが、非常事態につき死体を漁らせてもらう。何も持っていなかったが、指輪とナイフを手に入れた。ナイフは紐の付いた鞘付きなので、俺のベルトに固定した。取りあえず武器は手に入ったが、問題は食い物だ。

それにしても、このプレートアーマーは何なのだろう？　ウチの近所でこんな酔狂をやっている奴なんていないはずだ。造りだつて半端じゃない。どう見てもレプリカなどではなく本物だ。しかもかなり使い込まれている。傷が入っていて補修された跡だつてある。

何だろう——この状況は？

毘か？　何者かが、俺を陥れようとしているのか？　しかし、こんな有名人でもない田舎の

おっさんを陥れてどうする？ 騙だましたって金なんか持ってないぞ？

このアーマーと剣だつてタダではないはずだ。——となると、もしかして……まさか、異世界？ 冗談のような本当の話？

「じゃあ、『ステータスオープン！』とか言ったら開くのかよ！」

その言葉に反応してか、俺の目の前に光り輝く白い板が現れた。

「マジで出たわ」

【名前】 ケンイチ・ハマダ

【年齢】 38

☆シャングリ・ラ

☆アイテムBOX

☆ゴミ箱

「は？ コレだけ？ HPとかMPとかは？ スキルとか魔法とかは？」

それに、シャングリ・ラって何だよ。真っ先に思いつくのは巨大通販サイト。意味が分からん。取りあえず、シャングリ・ラ——と言葉に出してみるが、何の反応もなし。それじゃ——

触れてみる。画面が変わった。そこに表示されたのは、俺がいつも使っていた通販サイト——  
シャングリ・ラの画面だ。

シャングリ・ラは総合ネット通販会社で、本や生鮮食料品から、衣料品、玩具、新車&中古車の車やバイク、トラックや重機まで、マジで何でも売ってる。売ってないのは、飛行機や銃火器ぐらいなもんだな。月に1000円払えば、電子書籍や動画も見放題だ。

「マジか。こんなのアリ？　どんなチートだよ」

続いて、アイテムBOXとゴミ箱にも触れてみると、白いウィンドウが表示されるだけ。

「アイテムBOXっていうぐらいだから、物が入るのか？」

試しに、鎧の側に転がっていた剣を画面に近づけてみると——中に吸い込まれた。

「うわ！」

画面は——【錆びついた剣】×1——と表示が変わった。そして【錆びついた剣】の項目に  
触れると、別のウィンドウが立ち上がった。

【取り出しますか？】【ゴミ箱】——の2択。

取り出しのボタンを押すと、再び俺の前に剣が現れた。

「おお！　こりゃ、便利」

試しに、ゴミ箱を選択してみると、ゴミ箱のウィンドウへ移される仕様のようだ。そして、

ゴミ箱ウインドウの下には、渦巻きボタン。

「これは……?」

渦巻きボタンを押すと、別のウインドウが立ち上がった。

【ゴミ箱を空にしますか?】

ははあ、PCと同じか。ゴミ箱を空にしなければ、一定時間は保持されるってことだな。ゴミ箱から再度取り出すことも可能だ。アイテムBOXもゴミ箱も、どのくらい入るのかは現時点では不明……。取りあえず、何となく仕様は分かった。

しかし、これをそのまま使っているのだろうか? タダでこんな便利な物が使えるなんて、不気味だろ? 対価は? 散々使ったあとに、料金払えって詐欺じゃないのか? それとも、最後に悪魔が出てきて、料金の代わりに魂をよこせグヘヘってネタか?

——だが、しかし。わけの分からん能力でも、今は頼らないと——このままでは数日で体力を使い果たして、ここに転がってる鎧の騎士と同じ運命になる。

何はともあれ使ってみることにするか。腹を決めたので、シャングリ・ラの方へ目を移してみる。いつも使っていたサイトと同じだな。画面の上部に検索窓があって、タップすると、スクリーンキーボードが起動する親切設計。

【パン】と入力してみる。——普通に検索結果が表示される。うーん、便利だ。いつも使って

いる物と全く変わらないな。

【初回限定美味しいパンの詰め合わせ】という、柔らかそうな焦げ目が付いた艶々のパンが10個セットになっている——美味そうだ。あとは飲み物か……【美味しい牛乳】ってのが、3パック纏めて1000円ほどで売っている。コイツにしよう。カゴの中身を確認すると、2500円ぐらいだな。【購入】を押す……。

【残高不足です】——無情に表示される悲しい文字列。

「ええ？ 金か？ そりゃ金は必要だろうが、持ってないぞ？ どうすりゃいいんだ？」

悩んでいると、残高不足の下に【チャージ】という項目があるのに気がついた。押してみると、新しいウインドウが立ち上がった。

「ここへ金を入れろってことか……でも、金はない。どうすりゃいい？」

ブツブツ言っても、ウインドウは何も答えてくれない。やけくそになって、先ほどアイテムBOXへ入れた剣を突っ込んでしまう。

「これでも持ってけドロボウ！」

だが、剣はウインドウの中へ吸い込まれた。

【錆びついた剣】×1、そして、その下に——。

【査定・買い取りしますか？】

ええ？ 買い取りもしてくれるのか？ 地金の値段か？ 取りあえずポチッと押してみる。

【査定結果】【錆びついた剣 買い取り値段10万円】

「いちじゅうひやく——10万円か？ そんなに高いのか？」

買い取り査定の下にさらに項目がある。【詳細を表示する】

査定内容を、教えてくれるのか。こりゃ、便利だな。

【錆びついた剣（地金） 査定値段5000円】

【石（ルビー） 査定値段9万5000円】

え？ ルビーなんて付いてたのか？ 錆びついて汚れて見えない所に石がはまっていたのかもしれない。金はすぐに欲しい。この値段で買い取ってもらうことにした。

「ポチッとな」

すぐに決済されて、10万円がチャージされた。

「よっしゃ！ でも、これが本当なら、取りあえずは食い物に困らないが……」

嘘か本当か、はたまた冗談か分からないが、商品を入れたカゴを表示して【購入】を押す。すると、何もない空間からドサドサと、袋に入ったパンと、パックの牛乳が3本落ちて来た。ちよつと、落ちてくるのはどうなのよ？

しかし、10万円ぐらいじゃ、毎日使ったら1カ月ぐらいしか持たないぞ？ どうしても人

里に行つて、金を稼ぐ必要がある。もしくは、貴金属やら宝石が出る鉱山があれば、チャージできるだろうが、そんな所をどうやって探す？ 悩んでも仕方ない。そんなことより、腹の虫を黙らせるのが先決か……だが、目の前にある鎧の白骨死体が気になる。

「う〜ん……」

しばし考えたが、白骨死体から鎧を外し、シャングリ・ラでスコップを購入——2000円也。地面を掘り起こすのに使うこれ、俺の地元じゃスコップと呼んでいるが、JIS規格ではシャベルというらしい。

新品のシャベルで穴を掘る。腐葉土なので土は柔らかい。50cmほどの深さでいいか……。穴に白骨を入れて、埋め戻す。

「成仏してくれよ」

シャベルをアイテムBOXへ入れて手を合わせる。この世界に仏様はいないだろうな。だが、俺なりに礼は尽くした。手に入れた物がありがたく使わせていただく。白骨死体から剥がしたプレートアーマーを買い取りウインドウに突っ込むと、すぐに査定が出た。

【査定結果】【プレートアーマー（中古） 買い取り値段5万円】

ふむ5万円か——結構いい値段だな。大体、買い取りつて、どこが買い取ってるんだよ。意味が分からん。

目の前の白骨死体もなくなったので、パンを食おうとしたんだが——せっかく通販が使えるんだから、試してみたいことが頭に浮かんだ。

シャングリ・ラでカセットガスコンロを買う——2000円也。カセットガスを購入、3本で300円。1本100円だな。小さいフタ付きの鍋1000円。そして、水——ナントカの天然水が2L6本で1200円。最後にカレーカップ麺ビッグ12個2500円。

【購入】っと

ドサドサと購入した物が落ちてきた。早速、ガスコンロにカセットガスをセットして鍋を載せ、水を入れてお湯を沸かす。お湯が沸いたらカップ麺に入れて——3分待つ。そうそう、割り箸も買わないとな。俺は竹のやつが好きなんだ——100膳入りで500円。これだけあればしばらく使えるだろう。

「ははは！ 完成だ！ これぞ、文明の味！」

カレーカップ麺ビッグをすすりながら、パンを食う。

「うめー！」

柔らかくて甘いパンに口の中でカレーが絡む——うくむ、カレーは異世界でもまさに正義也。炭水化物に炭水化物じゃねーか、という話もあるが、炭水化物こそ正義なんだよ。

本当に、ここが異世界なのかは分らんが、カップ麺とパンを食って落ち着いた。

人間、腹いっぱいになると、楽観的になるもんだ。しかし、このままではジリ貧だ。なんとか人里に行つて、商売か物々交換をして金を稼がないと。稼いだ金で通販して、さらに高く売る——なんとかなりそうじゃね？　こういふので定番といえば、香辛料だ。詰替え用の1袋100円の胡椒こしよとかが、高く売れちゃうんだろ？　もう楽勝じゃね？

まあ、そのためにも、この森を脱出しないと。

「さて、どうするか……」

シャングリ・ラでコンパスを1500円で購入。コンパスの針は一定の方向を差しているのだ、この世界にも磁界は存在しているようだ。さらに、虫除けスプレーと、少々値は張るが——マウンテンバイクを2万円で購入。

それにしてもアイテムBOXは便利だな。あれだけ買ったのに手ぶらだぜ。こいつを利用して運び屋なんかもできるかもな。アクセスできるのはおそらく俺だけだろうし。

「さて、行くぜ！」

マウンテンバイクに跨またがり、出発進行！　森の中をコンパスを確認しつつ、ゆっくりと走り人里を目指す。

別に慌あわてる必要はない。食い物はあるんだ。これぞ、満腹者の余裕。



——マウンテンバイクに跨がり2日め。

既に数十kmは進んでいるはずだが、森の切れ目は一向に見えない。

どんだけ広い森なのか。延々と巨大な針葉樹が並んでいる。植林でもしなければ、こんな感じにはならない。原生林つてのは針葉樹・広葉樹が入り乱れてるのが普通だからな。一休みして、水を飲む。そしてアイテムBOXから取り出した、虫除けスプレーを全身に掛ける。やはり森の中、虫もそれなりにいるようだ。

途中、シャングリ・ラで購入した食い物を食べつつ、アイテムBOXやゴミ箱の能力もテストする。例えば、生きている昆虫はアイテムBOXに入らないが、死骸なら吸い込まれ——【虫（甲虫）】×1のような表示が変わる。ならば植物はどうなのかと、シャベルで掘り起こした苗を入れると——【苗】×1のように表示される。植物は物によっては、固有名が表示されるので、名前が付いている植物もあるのだろう。

面白いのは、熱湯を入れたコップを入れても、そのまま保持されることだ。しばらく時間をおいても冷めることはなく、いつまでも温かい。これだけでも何か面白そうな商売ができそうだな。肉や野菜をアイテムBOXへ入れておけば腐ることはないのだから。

そして、ゴミ箱は何でも飲み込むブラックボックスだ。お菓子の袋やカップ麺の残り汁など、何をつっ込んでも渦巻きボタンを押せば消えてなくなる。どこへ行っているかは知らないが、生き物が入らないのは、アイテムBOXと同じ仕様だ。人間や生き物を巻き込まないような安全装置が働いているのかもしれない。

そんなことを確かめつつ、異世界へやって来て2日目が暮れようとしている。

早めにマウンテンバイクを降りて、大木に立てかける。キャンプに備え、1人用のテントを張る。これもシャングリ・ラで購入した——2000円だ。昼間は穏やかな気候で少々暑いくらいなのだが、朝方はちょっと冷え込むので、寝袋も買った。これも2000円だ。

焚き火に火を点けるための着火剤と、カセットボンベに取り付けるガスバーナーを購入——2500円也。火があれば暖も取れるし、生き物避けにもなる。

今日はちょっと豪勢に焼き肉にしてみるかな。1・5kg 2000円の豚こま肉を購入。余ったら、アイテムBOXへ入れておけばいい。

焼き肉のタレは1Lが1本1000円。俺が愛用しているジンギスカンのタレだ。本来は羊肉用だが、普通の焼き肉に使っても美味しい。そして、焼き肉とくれば、ご飯だな。シャングリ・ラで保存パックに入ったご飯を買う。いつでも温めるだけで飯が食える。

カセットガスコンロをもう1個と、コンロに載せる金網を1000円で購入。火を点けて肉

を焼く。もうもうと白い煙が立ち上り、ジュワジュワと脂の焼ける音と香ばしい匂いが立ち込める。

「美味しい！ 美味すぎる！」

口に入れると鼻へ抜けるニンニクの香り。ジンギスカンのタレは羊肉に対抗するためにニンニクが多めなのだが、その香りが食欲に火を付け、滴る肉汁が口内で混然一体となつて、米の飯によく合う。こいつはビールにもピッタリだが、あいにく俺は飲まない人だからな。パツクのご飯を箸で大きく取ると口の中へ放り込んだ。

米の飯を頬張りながら考えた——ここが本当に異世界なら、この世界ならではの美味しい肉があるかもしれない。そんな美食を探すのも異世界冒険の醍醐味つてやつだな。

だが、焼き肉の臭いがヤバい物呼び寄せているのに俺は気付かなかつた。飯を食い終わって背伸びをすると、なにやら視界に黒い物が映つた。改めて辺りを見回す。10頭ほどの黒くてデカイ異形の影——狼のような生き物が俺の周りを取り巻いていた。

俺は自分の行為を後悔した。山で焼き肉の匂いをさせたら、動物が寄ってくるのは予想できなはずだ。が、後悔先に立たずだ。辺りは既に暗くなり始めている。

「おわああ！ 武器！ 何か武器を！」

焚き火から火の点いた薪まきを取り、黒い動物へ向かつて投げつけ——それと同時にシャンゲ

リ・ラの画面を出して武器を探す。

「武器！ えくと、弓はどうだ？」

いや、弓なんて使ったことがない。どうやって扱うか全く分からん。

だが、同じ弓の検索ページに、ゴムで弾を飛ばすスリングショットが載っていた。

「これだ！ これなら、俺にも分かる」

家庭菜園にやってくるカラスを追い払うために使ったことがある。全く同じ物を購入した。一緒に弾として9mmのボールベアリングも購入。さらに噴き出し花火セットも購入した。実家で飼っていた犬が花火をすごく怖がっていたので、この黒い生き物にも通用するかと閃いたのだ。スリングショットと花火で1万円円弱。ボールベアリングは80個2000円だ。

購入した物がドサドサと落ちてきた。噴き出し花火の導火線に焚き火で点火。3つほど投げつける。白い火花が噴水のように勢いよく噴き上がると、もうもうと煙を吐きながら辺りを白く照らす。さすがにビビったのか、黒いやつらはウロウロと彷徨くように後退し始めた。

「よし！」

俺は、やつらに追い打ちを掛けるように、袋からボールベアリングを取り出すと、そのままポケットに突っ込み、スリングショットで連射し始めた。

1発2発3発——— 少しずつ修正していくと、4発目でやつらの1匹にヒットした。

「ギャン！」

犬のような泣き声を上げて、後退あひずきりする黒い獣。俺は間髪を入れずに、噴き出し火花を次々と放り投げると、スリングショットを連射し続けた。

「キャン！」

俺の攻撃に、1頭が飛び上がって逃走し始めた。スリングショットの弾が、どこか急所に当たったのだろう。目かあるいは鼻か……。このスリングショット、薄いベニア板なら貫通するぐらいの威力がある。これだけ攻撃をしていると、徐々に命中率も上がってくる。

1発2発と命中弾が多くなって来た。ここぞとばかりに畳み掛ける。

「ギャン！」

「キャン！」

1頭2頭と脱落し、ボスらしいのが逃げ出すと、ほかのやつらも一斉に逃げ始めた。

「ふおおお〜！」

辺りに静寂が戻ると——俺は大きなため息と共に尻もちをついた。危機一髪だったが、撃退に成功したようだ。しかし俺は、あまりに迂闊うかつすぎた。動物に全く出会わなかったため、警戒心が薄れていたのだ。慌てて TENT を畳み、焼き肉の道具も何もかもアイテム BOX の中へ突っ込むと出発の準備を始めた。ここに留まるのは危険だ。

辺りはもう暗いが——やつらが戻ってくるかもしれない。野生動物は意外と執念深い。俺は暗闇の中にマウンテンバイクを漕ぎだしたのだが——全くこのアイテムBOXってやつは便利だな。こんな時でも手ぶらで運転に専念できる。だが暗すぎる。少し前方以外は全く見えない。マウンテンバイクにもライトがついているが、役に立たないのだ。

やむを得ず、シャングリ・ラの画面を開いて、頭に付けるLEDヘッドライトを購入した。鉱山で働く人が頭に付けているやつだ。早速、乾電池を入れて、頭に装着してみた。

「スイッチオン！ おおっ！ こりゃ明るい！」

目潰しにも使えそうだ。この光を当てられたら、目の前が真っ白になるだろう。

先ほどの恐ろしい場所から離れたい一心で、マウンテンバイクをひたすらに漕ぐ。

離れる！ 離れる！

何も考えられず、ひたすら頭の中で呪文のように唱えながら、暗闇の中を2時間ほど漕いだらうか。大木の間にテントを張ると焚き火をおこし、キャンプをする。

暗くて薪が探せないので、シャングリ・ラで薪を購入した——2000円だ。

今まで、かなり物を購入したが、まだアイテムBOXは一杯にならない。容量を教えてください。パーセンテージやらないので、見当もつかない。

寝なくてはダメなのだが、先ほどの恐怖で目が冴えてしまって全く眠れない。また襲われた

らどうしよう——そんなことばかり考えてしまう。もし敵が現れても、この明るいライトで目潰しして、スリングショットでなんとするだろう。だが、あくまで希望的観測だ。全く眠れず、ひたすら焚き火の前で朝を待つ。夜がこんなに怖いとは思わなかった。今までが楽観し過ぎだったのだ。

やっとウトウトし始めた頃には、空が白み始めていた。



夜が完全に明けると、道具を全部アイテムBOXへ突っ込み、朝飯も食わずに、俺はまたマウンテンバイクをひたすら漕ぎ続けた。なんとしても早くこの森を脱出したかった。

アイテムBOXからパンを取り出し、かじりながらひたすら漕ぐこと5時間ほど——いい加減ケツが痛い。眠いし、そろそろ休んだ方がいいだろうか？

その時、俺の目の前に明るい光が見え始めたのだ。森の切れ目だ。明るさが増すほどに下草が増え、森が切れる場所では、人間の背丈ほどもある草が緑色の壁となって行き先を閉ざす。

「うわあ——こりゃ、森は途切れたけど、今度は草むらかよ……」

取りあえず、この先がどうなっているのか知りたい。俺はシャングリ・ラの画面を出すと、

アルミ製の6段の脚立を購入——少々高い買い物だが仕方ない。こいつを広げて木に立てかけると、5mほどの高さになる。1000円の単眼鏡を購入して、脚立に登る。

ある程度の高さまで登ると、背の高い草むらの先まで見通せるようになった。そして、その先には——城壁に囲まれた都市らしきものが見える。単眼鏡を使って確認してみると、確かに都市で、人が動いているのも見える。

都市からこちらに向かって道路が伸びているので、森の中を通っているのかもしれない。つまり俺は、その道路と並行にずっと森の中を走っていたわけだ。——となれば、このまま右に進めば、道路に出ることができはす。

「やった……」

脚立から降りた俺を、強烈な睡魔が襲う。進むべき道筋が見えてほっとしたのかもしれない。そのまま俺は、大木の根元で眠りについてしまった。

## 2章 街でゆるい商売を始めることにした

——目が覚めた。

寝込んでしまったことを後悔したが、まだ日は高い。眠っていたのは3時間ぐらいか？

早くここから右手に進んで道路を目指さなければ。だが、この世界って、異世界人の扱いはどうなんだろうなあ。もしかして、いきなり捕まって奴隷とか？ あり得るな……。

しかし、このままではどうしようもない。パンをかじりながら、シヤングリ・ラの画面を出して残金を確認してみる。

「7万6000円ちよつと……もう半分使ったのかよ」

ヤバイ。チャージした金が既に半分ぐらいになっている。なんとかして金を稼がないと——。

ここはやはり、定番の胡椒でいってみるか。シヤングリ・ラなら、詰替え用が100g400円で売ってる胡椒が金貨や銀貨に化けるなら、大儲けができる。胡椒の入れ物をシヤングリ・ラで探す。

「革製の巾着袋とかないかな？ お！ あるじゃん」

胡椒を入れて腰のベルトに括り付けると——おお！ RPGの装備っぽい！ こんなのをゲ

ームで見たことがあるぞ。胡椒がダメなら、都市まで行ってから市場を回って、売るものを決めよう。商売の前に、俺の存在がこの世界でどう捉えられるかが問題だしな。

脚立を出しっぱなしなので、アイテムBOXに収納。マウンテンバイクに跨ると、今までやって来た方角から右手——3時の方向へ漕ぎ始めた。

「電動アシストマウンテンバイクが欲しいけど、充電できないし、高いよなあ」  
1時間ほど漕ぐと、森の切れ目に道らしき物が見えてきた。

「ここからは、マウンテンバイクは拙いだろう。徒歩にするか……」

マウンテンバイクをアイテムBOXに入れて歩き出すと、すぐに道路に出た。

舗装はされておらず、砂利も敷いていない。タダの土の道だ。雨が降ったら泥濘ぬかるみぞう。

だが、森の中よりは歩きやすい。アイテムBOXのおかげで荷物もないしな。

しばらく歩くと、結構交通量が多いのに気が付く。荷物を積んだ馬車がひっきりなしに通るのだ。幌付き、幌なし、いろんな馬車を通る。全部、形が違う。手作りなんだろうな。

馬車の邪魔にならないように、道の端っこを歩いていると、突然声を掛けられた。

「あんな、歩きかい？」

振り向くと、横に1頭立ての馬車が止まった。

「ダリアまで行くのかい？」

カーキ色の服を着た若い男が俺の方を見ていた。いや、そんなことより——問題は、言葉が通じるってことだ。

「もしかして、俺のことか？」

「あんた以外に誰がいるんだよ？ この先のダリアに行くんだろ？」

森から見えた都市はダリアというらしい。やはり言葉が通じる。こいつはラッキーだ。

「ああ、そうだ」

「乗って行くかい？」

「ありがたいが、金を落としてしまっただけで持っていないんだよ」

「そいつは災難だったな。ダリアはすぐそこさ、タダでいいよ」

マジか、渡りに船だな。マウンテンバイクが使えるれば、すぐに到着するんだが。男の顔をうかがったが裏はなさそうなので、素直に乗せてもらうことにした。

「俺の名前はフヨウだ、よろしくな。商人だよ」

「俺はケンイチだ」

「はは、変わった名前だな」

ここぞとばかりにいろいろと聞いてみる——俺の黒い髪も珍しくはないようだ。馬車にガタガタと揺られながら、男との会話が続く。男の胸の所には、首から下げた棒状の金属のアクセ

サリーのようなものが光っている。先端には石が付いている。

「それじゃ、あんたの在所<sup>ところ</sup>じゃ、黒い頭ばっかりなのかい？」

この男の髪は赤っぽい茶色だ。染めたのではなく、もともとこういう色らしい。

「そうだな。恥ずかしながらこの年になるまで、村の外にあまり出たことがなくてな」

「商人でもなきや、そういう奴は多いよ。あんたも商売するつもりで村を出たのかい？」

「ああ、そんなところだ」

取りあえず、そういうことにおこう。家じゃ畑仕事もしていたし、ど田舎だったんで、農業の知識もそれなりにある。

「それにしても、手ぶらじゃないか……あんた、もしかしてアイテムBOX持ちか？」

「アイテムBOXを知ってるのか？」

こいつは驚いた。アイテムBOXって単語が既にあるのか……確かにステータス画面にはアイテムBOXって書いてあるがなあ。画面は日本語で書いてあるし……。

「滅多に持つてる奴はいない。俺もアイテムBOX持ちに会ったのは初めてだ」

「そうなのか」

「アイテムBOXを持つてるのに、今まで商売をしてこなかったのか？」

「ああ、畑で採れた野菜とかを入れていた。入れておけば芽が出たり腐ったりしないしな」

無論、嘘だ。

「そんな話は聞いたな。便利だよなあ。生鮮食品や貴重品の運搬でも稼げるじゃないか」

「まあな。いろいろと試してみようかと思っている」

商売のやり方についていろいろと質問する。商売をするには商業ギルドに登録しなくてはならないらしい。登録料は銀貨1枚だが、それがどのぐらいの価値なのかは不明だ。

話をしている間に分厚い城壁を潜り、街に到着した。街の入り口には歩哨が立っていたが、検問をされることもなく、ほかの人たちも自由に出入りしている。

そのまま馬車で街の中を進む。建物は石造りで、高くても3階ほどだ。通りには人も多く活発な街だという印象を受ける。

「街に入るのに検問とか、税金を取られたりはしないのか？」

「税金はないねえ。そういうのがある街の話も聞くが——この辺りにはないな」

5分ぐらいで、目的地に着いたようだ。荷物を下ろすのを俺も手伝う。

「悪いね」

「商人になるんだ。タダは拙いだろう。それなりの対価を支払わないと」

荷物を下ろし終えたあと、彼に商業ギルドと宿屋の場所を教えてもらう。こういうのは地元の人に教えてもらうのが一番だ。ボツタクリの心配もないしな。

「兄さんいい人だし、いろいろと教えてもらったんで、コレをやるよ」

俺は腰に付けた革の巾着袋を彼に差し出した。男は袋を開け、匂いを嗅いで驚いた。

「こりゃ、胡椒じゃないか！ こいつは肉料理には欠かせない貴重品だ。臭みを消して食欲を増してくれる。一振りすれば、タダの肉焼きが高級料理に早変わりだ」

「そう、肉料理の決め手になる物だ」

「ふう……冗談だろ？ こんな高い物もらえない——金を払うよ」

「いや……」

「おっと待ちな。さっき、あんたも言ってたが——俺たち商人は安い物は好きだが、タダじや物は貰わない。なぜだか分かるかい？」

しばし考えて、俺は人差し指を立てた。

「タダより高いものはない」

「その通りだ。商売の基本は物々交換だ。対価のない物は取引しない。これが基本さ」

「俺をタダで馬車に乗せくれたが、そういう場合は何か裏があると考えた方がいいのか？」

「まあな、悲しいけど、それが現実のことが多いな。あんたは商人に向いているよ」

男はそう言うと、懐から金の入った袋を取り出し、俺に銀貨を2枚寄越した。それと律儀に布袋の代金までくれた。銅貨6枚だ——ありがたい。

現金は手に入った。価値はちょっと不明だけだな。だが、高価なもの、といって渡してくれた対価だから、それなりの金額なのだろう。ついでに金貨と銀貨の換金比率も聞く。銀貨4枚で金貨1枚のようだ。着々とこの世界の情報が集まっているな。

だが、嫌な話も聞く。香辛料を独占している、スパイスシンジケートが存在しているらしいのだ。まあ、どこにでもある話だな。儲かるものには利権ができて群がる奴らがいるってわけだ。若い商人に別れを告げ、俺は宿屋に行ってみることにした。取りあえずの活動拠点が必要だし、胡椒や香辛料で簡単に儲けようと思つてたら、出鼻を挫かれたな。残念……市場を回って何かほかの売り物を探さないと。

通りをしばらく歩きながら街を観察してみる。なかなか賑やかだな。ちょっと上等そうな建物の窓には透明な板が入っているので、ガラスは存在しているが、高価な代物なのだろう。ガラスじゃなくてテクタイトやらファンタジーな物質かもしれないが……。

5分ほどで宿屋らしき建物が見えてきた。石造りの2階建てで、壁に塗られた白い漆喰のよ  
うな物は、かなり剥げ落ちてい  
る。木の扉の上には肉と皿が書かれた看板。

「いかにも、それっぽいな……」

中に入る——外側は石造りだが、店内は板張りで薄暗く、木製のテーブルが8つと、その周りに椅子が並んでいる。宿屋というよりは食堂だな——奥にはカウンターが見える。

客はいない。今はおそらく2時頃だ。昼飯の客もいなくなつて、空いているのだと思う。

「いらつしゃい。食事？ それとも、泊まり？」

俺に声を掛けてきたのは、ちよつと目の大きい女の子。粗末な白いブラウスに、オーバーオールのような紺色のワンピース。18歳ぐらいであろうか、なかなかかわいい。後ろで纏めた黒髪にエプロンのような前掛けをしている。

「泊まりだと、飯付きで小四角銀貨1枚、素泊まりなら銅貨3枚」

「素泊まりで頼む」

「代金は前払いだよ」

銅貨を3枚渡す。飯はシャングリ・ラで買えるからな。現地通貨は節約しないと。

「この娘なのか？」

「違うよ。ここで働いてるの。おじさんはこの辺りの普請ふしんで稼ぐために、口利き屋でも探しているの？」

「いや、商売をやるうと思つてな」

「じゃあ、読み書き計算ができるんだ」

「うっ！」

そうか、読み書きがあつたか。すっかり失念してたぜ。俺がショックを受けていると、女の



子が宿帳らしきものを持ってきた。

「読み書きできないのに、どうやって商人になるのさ。商業ギルドの登録には読み書き計算が必須だよ？」

「そうなのか……異国の言葉なら読み書きできるんだけどなあ。それに、計算もできるぞ」

「じゃあ、リンカーが12個入った袋が4つありました。リンカーの数は全部で何個？」

リンカーが何だか分からんが、答えは分かる。

「48個だろ？」

「すごい！ 本当に計算はできるんだ！ おじさんの名前は？」

「ケンイチだ」

「ふうん、変な名前。あたしは、アザレア。よろしくね」

アザレアが宿帳に俺の名前らしき文字をスラスラと書いている。この子は読み書きができるようだ。——しかし書かれたその文字は——なんだか、ローマ字のような……。

「アザレア、ちよつと頼みがあるんだが……」

「な〜に？」

「俺に読み書きを覚えてくれないか？」

「ええ？」

「簡単でいいんだ。お札に異国のお菓子をやるぞ？」

「本当に？ お菓子って甘い？」

お菓子という単語に、アザレアの目が子供ののようにキラキラと輝く。

「ああ、甘いのもある。舌の上でとろけるやつとか、サクサクと口の中で弾けるやつとか……」

「うあわ……」

アザレアは甘いお菓子を想像して、天井を見ながら涎たぐを垂らしそうになっている。俺の頼みを引き受けてくれるようだ。

「うん、仕事が入ってない時ならいいよ」

俺は2階の部屋に案内された。板張りの部屋にベッドだけ。天井板もなくて上部の構造物が剥き出しになっているが、部屋の中は清潔で綺麗なのでひと安心した。

「シーツは毎日、このカゴに入れて出してね。ほかの洗濯物は追加料金になるから」

「ああ、分かった。それじゃ暇な時でいいから、文字をちよつと教えてくれよな。ここには何日か泊まるつもりだから」

「分かった。お菓子忘れないでね」

アザレアが部屋から出ると、俺はベッドに倒れ込んだ。肌触りから、シーツは麻だな。

とにかく、いろいろとあり過ぎた。異世界らしきこの世界で——これから何とかして、暮ら

していかねばならないのだ。しかし、やっと辿り着いたベッドに安心してしまった。ちょっと横になるだけのつもりだったのだが、そのまま眠ってしまった。

「はっ！」

ベッドの上で目を覚まして慌てた。辺りは既に暗くなっている——何時頃だろうか？

「ヤバイヤバイ……」

くそ、暗くて何も見えない。明かりを出すか……シャングリ・ラで検索を掛ける。

森の中をマウンテンバイクで走った時に頭に付けたLEDヘッドライトならあるが——あれを部屋の中で使うわけにもいくまい。

無難なところなら蠟燭だが、暗いだろうな——ランプで検索を掛け直す。

LEDのランタンが安いが、オーバーテクノロジーのLEDはちょっと拙いような気がする。まあ、誰にも見られなければいいのだが。魔法のランタンだって言って誤魔化せるかな？ いや、魔法があるか、まだ分からんしな。同じページに灯油ランプがある。なるほど、灯油ランプって手もあるか。だが——。

「灯油って売ってるのか？」

灯油で検索を掛けても売ってないが、ホワイトガソリンなら売ってるな。同じ検索ページに

ホワイトガソリンを使ったランプが並んでいる。こいつを買おう。購入ボタンを押すと、箱に入ったランプとホワイトガソリンのタンクが、大きな音と共に落ちてくる。

「壊れるだろ！」

壊れたら返品きくのかよ？ 甚だ疑問だ。

荷物がやって来たのだが、真つ暗で何も分からん。結局、アイテムBOXからLEDヘッドライトを出して頭に装着した。昔ながらの灯油ランプなら使ったことがあるのだが、こんな加圧式のガソリンランプは使ったことがない。説明書を読みながら点灯させた。

「やったぜ！ こりゃ、かなり明るいな」

ランプの明るさに目を細め、シヤングリ・ラからグラノーラを買った。

深皿いっぱいグラノーラを開けると、牛乳をぶっかけてムシヤムシヤと食い始めた。

「なんか何もない部屋で飯を食っていると、上京したての頃を思い出すなあ」

妙な郷愁に浸りながらも腹いっぱいになった。食器をアイテムBOXへ突っ込む。

さて、アザレアにあげるお菓子は何にしようかな……チョコは拙い気がする。もつとシンプルな——金平糖？ いや、ここは——。

「サ○マ式ドロップスだろ」

変わらぬこの缶——飴の色によっていろんな味が楽しめるのだが、果汁が入っているわけで

はない。ガキの頃に婆さんの家で食った記憶が蘇る——レモンやオレンジからなくなり、最後に残るのがハツカ味。懐かしい。

こいつの容器も探してみよう。『木製 箱』で検索を掛けてみると——おおつ、いいのがあるじゃん。300円ぐらいの塗装していない木製の箱、宝石箱らしい。これなら、お菓子入れにピッタリだろう。カートに入れて購入ボタンを押す。

それから読み書きを勉強するには紙が必要だ。コピー用紙やら中性紙は拙いだろうから、和紙を検索してみた。

「ほう、和紙のプリンタ用紙ってあるんだな」

50枚で500円だ。そうだ、紙を売って手もあるかな。紙は多分貴重品だろ？

「ポチッと——購入っと」

そんな皮算用をしながら宝石箱にドロップを入れていると、ちょうどドアをノックする音が聞こえてきた。慌てて、プリンタ用紙を袋から取り出し、包装をゴミ箱へ突っ込んだ。

「どうぞ。開いてるよ」

ドアが開くと、燭台しょうたいと何かの道具を持ったアザレアが顔を覗かせ、目を皿にしている。

「何？ この明るいのに」

「油を使ったランプだよ」

「へえ。でも灯油ランプってこんなに明るくないよ？」

「灯油ランプってあるのか？」

「持つてくる？ 追加料金が掛かるけど……」

「いや、これがあるからいい」

へえ、灯油ランプがあるのか。この世界の灯油の値段はどのぐらいするんだろうな。

「ここだと、灯油の値段ってどのぐらいする？」

「えーと、このぐらいの壺で小四角銀貨2枚」

彼女が示した壺の大きさは、人間の頭ぐらい。小四角銀貨2枚と言われてもピンと来ないが、ここの飯付きの宿賃が小四角銀貨1枚だから、2日分の宿賃か。かなり高い代物だな。俺がシヤングリ・ラで買ったホワイトガソリンの方が安い。

アザレアが小走りにやって来ると、ランプを覗き込んでいる。

「魔法じゃないのね？」

「魔法のランプってあるのか？」

「私は見たことがあるよ。こんな明かりの色じゃなくて、青っぽい光なんだ」

さすが異世界！ やっぱり魔法があるのか。だが俺が使っているシヤングリ・ラも魔法と言え、魔法と言えなくもない。

「今日は、仕事はないのか？」

「そう、暇なんだ」

彼女はベッドに腰掛けると、脚をブラブラさせている。

「ほら、これが報酬のお菓子だ。甘いぞ」

「え？ ホントに？」

アザレアはよく確認もしないで、ドロップを1つ摘むと、自分の口へ放り込んだ。

「甘い〜い！ へへへ、口の中が幸せで一杯だよ〜」

気に入ったようなので、ドロップの缶を取り出すと、宝石箱の中を一杯にしてやった。

宝石箱の中にドロップ——結構それらしく似合っている。

「ん〜！ こんなお菓子が食べられるなんて、まるで貴族様みたい」

ドロップを口に放り込んだアザレアは両手を頬に当てて、なにやら悶もたえている。

「貴族っているのか？」

「そりゃ、いるさ。でも、あまり関わらない方が得策だよ。こんなお菓子持っているのがバレ

たら、取り上げられちゃうかも」

「そいつは困るな……それよりも、読み書きを教えてくださいよ」

「いいよ〜」

彼女が用意したのは紙とペンだ。わざわざ持ってきてくれたらしい。

「紙は高いだろう。俺のがあるのから、コレを使ってくれ」

「な〜んだ。紙の料金も上乘せして取ってやろうかと思つたのに〜」  
なかなか、しっかりしてるな。

2人で紙とペンを使って文字を書き出して、付き合わせていく。何のことはない、少々違いがあるがローマ字とほぼ同じだ。数字も10進法だし、桁管理もアラビア数字と同じ。これなら対応表を作れば、すぐに覚えられる。読み書きの心配は、杞憂に終わりそうだ。

「な〜んだ。ケンイチ、読み書きできるじゃない」

「この国の文字も俺の国とさほど変わらないみたいだな」

「これなら商業ギルドに登録するのは簡単だと思うよ」

「アザレアも読み書きができるなら、商売をやればいいのに」

「商売をやる上で、大事なことって分かる？」

彼女に言われて、ちよつと考える――。

「もしかして、仕入れか？」

「そう！　こんなお菓子とかランプとか仕入先が分かんないよ」

「そうか」

「でも、ケンイチは商売で成功すると思うな。今から愛人候補になっておくかな？」

「こんなオッサンは止めとけ。お前の親父さんと変わらん年だろう」

「父ちゃんいないし」

「ああ、そうなのか……スマンな」

ヤバい地雷源に突入！

「いいよ。ケンイチいい人だし」

少々気まずいネタを振ってしまったので、誤魔化すために彼女の似顔絵を描いてみることにした。商売は素人でも、絵は一応プロだ。紙とペンで、クロッキー的なものを描き始めた。

「アザレア。ちよつと動かないでくれよ」

「なにになに？」

10分ほどで完成したので彼女に見せる。ランプに照らされて浮かぶ、アザレアの肖像。

「ええり！ すごい！ 肖像画描いてもらえるなんて、本当に貴族様みたい」

彼女は絵を胸に抱えてすくはしゃいでいる。そんな喜んでもらえるとは思わなかったな。喜んでるのはいいが、なぜかアザレアが服を脱ぎ始めた。ランプの光に浮かび上がる白い裸体。くつきりとした白と黒の陰影が、ことさら肢体の形を際立たせている。

上着とスカートを脱ぐと、いきなり裸だ。下着らしいものはこの世界にはないらしい。

それ故か——街の女性は皆ロングスカートだったな。

「おおい！ 何をするんだ」

「お菓子ももらって、肖像画も描ってもらったんじゃ、あたしがもらいすぎでしょ」

そうか？ そうなのか？ 異世界にやって来た早々、こんなことでいいのだろうか……。



——次の日の朝。結局やってしまった……ベッドでは裸のアザレアが寝息を立てている。

「はあ……こんな若い子に何やってんだ、俺」

落ち込んでいても仕方ない、やるべきことがあるのだ。アザレアを起こして、牛乳をかけたグラノーラを食わせる。

「何これ〜！ パリパリして甘くて美味しい！ ミルクも甘〜い！」

「旅行用の保存食だよ。乾燥させてあるから日持ちする」

裸のアザレアがグラノーラを頬張っている。会話の前に服を着て欲しいのだが……。

「コレも売れると思うよ」

「砂糖や果物を使っているからな——高いと街の人間は買わないだろ？ 貴族は相手にしたく

ないしな」

アザレアが甘い物を食べて貴族様みたいと言っていたので、多分、砂糖も貴重品だと思われる。故に、安くは売れないだろう。

「そっかぁ——すごく美味しいのに。金持ちに売れると思うよ」

「金持ちの間で流行ったら、絶対に貴族の耳にも入るだろ？」

「それもそうだね」

普通に食事をしている姿は、18歳の女の子だ。

ついでに彼女に硬貨のことも聞く。元世界との感覚と照らし合わせると、銅貨は1枚1000円ほどの価値らしい。銅貨5枚で小四角銀貨(5000円)、小四角銀貨10枚で銀貨(5万円)、銀貨4枚で金貨1枚(20万円)——という感じだ。もともと、通貨制度も国によって違うらしいが。

——ということとは、ここの宿賃は1日3000円ってことだな。まあ、素泊まりで3000円ならこんなもんだろう。昨日も金を使ってしまったので早く現金を稼がないと。俺も飯を食ったら、商業ギルドへ行ってみなければ。

それに昨夜、彼女と話していて気が付いたが、俺のステータス画面は、彼女には見えないらしい。どうやら本人にしか見えないようだ。面白いのは、文字を書いた紙をアイテムBOXに

いれて、それを選択すると画面上に表示されるのだ。これで、ギルド登録の際にテストがあつても、カンニングし放題つてわけだ。

飯を食い終わって着替えたアザレアに、今日の宿賃を銀貨で支払い、お釣りをもらおう。

金は全部アイテムBOXへ入れた——枚数を表示してくれるから、ありがたい。同じ物が沢山あるものを取り出す時には——【何個取り出しますか?】という表示も出る。

ギルドの登録料は銀貨1枚、約5万円か……結構高いが仕方がない。

「ここか……」

教えられた場所にやって来た。目の前にあるのは、白い石造りで3階建ての建物。石には模様が刻まれており、かなり豪華（うすし）な造り。窓には全部ガラスがはめ込まれている。

立派なドアを開けて中に足を踏み入れる。窓にガラスがあるせいも、中も明るく広く感じる。正面のカウンターには受付嬢が座っている。立ったまま様子をうかがっていると、商売の相談やら貸付なども行っているらしい。取りあえず正面のカウンターへ行く。

受付嬢は白い服を着て、まるで看護師のようだ。これが制服なのか——頭には長四角の帽子を被っており、それがまた看護師風なのに拍車を掛けている。

「はい、今日どのようなご用件でしょうか?」

「ギルドへの登録をお願いします」

「承知いたしました。登録料は銀貨1枚になります。それと、この紙にご記入ください」

うっ！　ここで、銀貨1枚——5万円は痛い——俺は恐る恐る聞いてみた。

「あのく、登録料の分割払いつてできませんかね？」

「できますよ」

10回払いにできるようだ。こいつは助かったぜ。

職員から差し出されたのは手書きの登録書類だ。まだ印刷技術がないのだろう。項目は氏名や年齢そのほか——出身地の欄もあるが、この都市ダリアでいいだろう。ほかの地名なんて知らないしな。その右側には算数の問題が——3桁の足し算が3つ、2桁の掛け算が2つ、多分、これがテストなのだろう。拍子抜けだ。

だが、まだ昨日の今日で、文字についてはあやふやなところがある。アイテムBOXを開き、アンチヨコの表示を出してカンニングする。

全て書き込んで受付に差し出すとOKが出た。しばし椅子に座って待つ……受付嬢が持ってきたのは、上部に穴が開いた細い棒状の金属。あの若い商人が首から下げていたものか。これがギルドの証なんだな。商売をする時には見える所にこれを掲げないとダメらしい。

それ故、普通の商人たちは首から下げているようだ。登録は無事に済んだし、これで商売し

でも問題なし。

——次は市場調査だな。ギルドで市場の位置を教えてもらい、外へ出た。

乱雑で人があふれる賑やかな市場——並んでいる店ほとんどが露天で、屋根が付いている店、付いていない店、いろいろだ。販売されている品物も刃物や石と、果物や野菜などの生鮮食料品がごちゃ混ぜに、所狭しと並べられている。

商人たちも結構アバウトに客とタメ口だ。身分が高い連中が相手でなければ敬語は使わないらしい。紙も見つけた。ちよつと茶色な紙が1枚銅貨1枚(1000円)だ。こりゃ、紙を売っても儲かるかもな。あとは……食器かな？ シャングリ・ラで売っているような白い無地の皿が小四角銀貨1枚(5000円)以上で売られているのが目に付く。

柄が入ると値段が跳ね上がるが、あまり売れている印象はない。この市場にやってくるのは、街の一般の間ばかりで、値段の高い物はなかなか買えないのだろう。

刃物も結構高く、粗末なナイフが1本銀貨1枚(5万円)以上する。シャングリ・ラなら5000〜6000円ぐらいで、結構いいものが売っているからな。あれなら銀貨2枚(10万)で売れるかもしれない。でも、錆びないステンレス鋼とか売っても大丈夫かね。いきなり気付かれることはないだろうが、ヤバくなったらほかの都市へ逃げるしかないな。金さえあれば、シャングリ・ラを使ってどこでも暮らせるわけだし。

# アフター男の 異世界 通販生活

朝倉ニニニ  
イラストやまかわ

試し読みはここまで  
続きは書籍版でお楽しみください

書籍情報はこちら

[http://books.tugikuru.jp/detail\\_tuhan.html](http://books.tugikuru.jp/detail_tuhan.html)